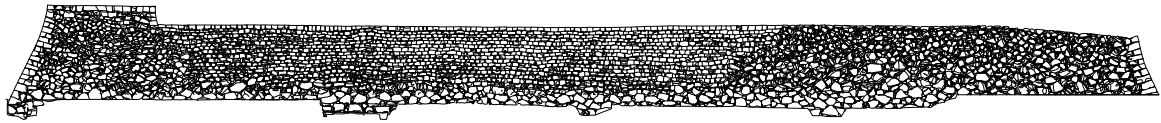


史跡津輕氏城跡(弘前城跡)
弘前城本丸石垣発掘調査報告書



令和3年度(2021)

青森県弘前市



調査区全景(南から)



明治29年(1896)の石垣崩落で滑り出した本丸石垣の根石と押し出された内濠石垣(南から)



本丸石垣南東隅角部根石検出状況(東から)

序

弘前城は弘前藩初代藩主津軽為信が建設を計画し、二代藩主信枚が慶長16年(1611)に築いた城郭です。築城から約400年経った今でも六つの曲輪、三重の水濠、土塁、天守、櫓、城門等藩政時代の縄張りや建造物が良好に残る全国に類を見ない貴重な遺跡です。

昭和27年(1952)には、惣構である長勝寺構、新寺構と合わせて「弘前城跡」として国の史跡指定を受け、その後、津軽氏の発展過程の理解を容易にするため、昭和60年(1985)に堀越城跡(弘前市)、平成14年(2002)には種里城跡(西津軽郡鱒ヶ沢町)が追加指定され、名称は「津軽氏城跡 種里城跡 堀越城跡 弘前城跡」と改められました。

弘前市では平成17年度(2005)に「史跡津軽氏城跡保存管理計画」、平成21年度(2009)には「史跡津軽氏城跡弘前城跡整備計画」を策定し、整備・活用を進めております。

本報告書は、平成28年(2016)から令和2年(2020)にかけて実施した弘前城本丸石垣修理事業に伴う発掘調査成果をまとめたものです。発掘調査では石垣の構造や変遷、孕みの原因が明らかになったほか、絵図や文献に残されていなかった内濠石垣や現在の石垣の中に眠っていた埋没石垣を検出する等、多くの発見がありました。本報告書が研究者のみならず、市民の皆様に広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の修理事業および報告書の作成にあたり、関係機関並びに多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げます。

令和4年3月

弘前市長

櫻田 宏

例 言

1. 本書は、平成28年度から令和2年度にかけて実施した史跡津軽氏城跡弘前城跡弘前城本丸東面石垣の解体工事等に伴う発掘調査の報告書である。但し、遺構の性格等を検討するにあたって、令和3年度に実施した同石垣I工区(北側)の積直しに伴う発掘調査成果も加味しているため、同年度の調査成果も一部掲載する。
2. 本報告書の内容は、文化庁、弘前城跡本丸石垣修理委員会の指導・助言が反映されているものであり、既刊の「史跡津軽氏城跡(弘前城跡)弘前城本丸発掘調査概報I~IV」(2014~2017)、「史跡津軽氏城跡(弘前城跡)弘前城本丸発掘調査報告書」(2018)、「史跡津軽氏城跡(弘前城跡)弘前城本丸石垣解体調査概報I」(2019)より優先される。
3. 本書の執筆・編集は、弘前市都市整備部公園緑地課弘前城整備活用推進室福井流星が行った。
4. 陶磁器の鑑定は掲載した347点のうち、188点を関根達人氏に依頼し、それを基に残りの159点を福井が行った。誤りがあるとすれば、その責の一切は筆者にある。
5. 以下の資料の鑑定、試料の同定・分析、出土遺物保存処理については、下記の方に委託または依頼した。

AMS年代測定……パリノ・サーヴェイ株式会社(平成25年・28年度、令和2年度)、株式会社パスコ(令和元年度)

樹種同定……片岡太郎(弘前大学北日本考古学研究センター)(平成30年度、令和2年度)

蛍光X線分析……パリノ・サーヴェイ株式会社(平成29年度)、株式会社パスコ(令和元年度)

鉛同位体比分析……株式会社パスコ(令和元年度)

獣骨鑑定……杉山陽亮(八戸市教育委員会)(令和3年度)
6. 出土遺物及び実測図・記録写真等の資料は、本報告終了後に弘前市教育委員会に譲渡し、適正に保管の上、積極的に活用を図る。
7. 弘前城本丸石垣修理事業及び本書作成にあたり、次の機関・諸氏からご指導・ご協力をいただいた。ここに記して感謝する次第である。(敬称略・五十音順)

青森県教育委員会文化財保護課 青森県埋蔵文化財調査センター (一財)弘前市みどりの協会
高岡の森弘前藩歴史館 弘前市教育委員会文化財課 弘前市立弘前図書館 弘前市立博物館
片岡太郎 嘉村哲也 北村繁 工藤司 小岩直人 坂本勝一 佐藤智生 杉山陽亮 鈴木隆
下高大輔 ツォウ チンイン 西川雄大 宮武正登

凡 例

1. 本書の地形図は、弘前市作成の現況測量図の他に、国土地理院発行の2万5千分の1及び5万分の1地形図を使用している。
2. 本書の座標値は平面直角座標系に基づいており、図中の方位は座標北、標高は海拔高である。
3. 遺構名は語句を用いて表しているが、以下の遺構については記号を使用し、遺構ごとに番号を付した。

井戸跡：SE 排水遺構：SD 土坑：SK ピット：P

4. 本報告書の土色については、『新版標準土色帖』（古山・竹原：2001）に準拠している。
5. 築石の呼称、積み方の分類については、『石垣整備のてびき』（文化庁文化財部記念物課監修 2015）に準拠している。
6. 本書に掲載された遺構図の縮尺は、それぞれの図面に明記した。また、遺構図の凡例は、統一したものでなく、各図面毎に付す。
7. 平面図では、実線(—)は調査区上端及び遺構上端、破線(---)は調査区下端及び遺構下端、推定線を表す。

8. 遺物実測図中の表示は次の通りである。

擦り痕 煤付着 黒色処理 赤漆 施釉範囲


9. 遺物実測図の縮尺については、原則として瓦が1/6、銭貨、剥片石器が1/2、これら以外は、1/3とした。但し、その縮尺で掲載が困難なものについては適宜縮尺を変更し、個別にスケールを付した。
10. 獣骨、種子は本文・遺物観察表・図版でのみ掲載している。
11. 遺物観察表中の表記は、下記のとおりである。
 () は推定値、< > は現存値、計測不能なものは - で表している。
12. 遺物写真の縮尺は統一していない。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第3節 調査要項(平成29年～令和2年度)	3
第4節 調査方法	5
第2章 弘前城跡の概要	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
(1)弘前城の歴史	8
(2)本丸東面石垣の歴史と修復履歴	9
(3)周辺の遺跡	10
第3章 発掘調査	13
第1節 調査概要	13
第2節 基本層序	13
第3節 遺構と遺物	33
(1)天守台及び本丸東面・南面石垣	33
(2)井戸跡(S E)	93
(3)排水遺構(S D)	113
(4)内濠調査	127
(5)内濠石垣	128
(6)土坑(S K)	144
(7)地鎮遺構	144
(8)櫓台確認調査	146
(9)遺構外出土遺物	147
出土遺物観察表	150
第4章 自然科学分析	167
第1節 AMS年代測定	167
(1)平成25年度 弘前城跡本丸石垣出土炭化材の年代測定	167
(2)平成28年度 弘前城跡本丸石垣発掘調査に伴う自然科学分析	168
(3)令和元年度 弘前城跡本丸石垣出土胴木の年代測定	171
(4)令和2年度 弘前城跡本丸石垣発掘調査自然科学分析	174
第2節 樹種同定	177
(1)平成30年度 弘前城跡出土胴木と井戸枿材の樹種同定結果	177
(2)令和2年度 弘前城跡本丸石垣出土木製品の樹種同定結果	178
第3節 金属製品自然科学分析	180
(1)平成29年度 蛍光X線分析	180

(2)令和元年度 蛍光X線分析及び鉛同位体比分析	181
第5章 考察	195
第1節 本丸東面石垣の変遷	195
(1)絵図の検討	195
(2)石垣の勾配	201
(3)本丸辰巳櫓台の推定位置	202
(4)本丸東面石垣の変遷	207
第2節 おわりに	209
引用・参考文献	209
図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 昭和25年8月24日陸奥新報	1	第37図 弘前新聞(大正4年7月27日)	43
第2図 調査区設定図	6	第38図 古写真とV期石垣の築石比較写真	43
第3図 遺跡周辺の地形分類図	7	第39図 S1断面図	47・48
第4図 遺跡周辺の表層地層図	8	第40図 S2断面図	49・50
第5図 「御本丸御絵図」(本丸東面部分)寛文13年(1673)	9	第41図 S3断面図	51・52
第6図 周辺の遺跡等	11	第42図 S4断面図	53
第7図 基本層序模式図 左:天守台部 右:埋没石垣付近	14	第43図 S6断面図	54
第8図 I層出土遺物(1)	14	第44図 A~C-16・17グリッド断面図	55
第9図 I層出土遺物(2)	15	第45図 天守台平面図 上:天守土台と天守台天端 の関係 下:天守台天端・敷石検出状況	56
第10図 I層出土遺物(3)	16	第46図 天守台平面図 上:天守台2段目検出状況 下:天守台2・3段目検出状況	57
第11図 I層出土遺物(4)	17	第47図 天守台・東面平面図 天守台2・3段目・ 本丸1段目検出状況	58
第12図 I層出土遺物(5)	18	第48図 天守台・東面平面図 天守台2・4段目・ 本丸1・2段目検出状況	59
第13図 I層出土遺物(6)	19	第49図 天守台・東面平面図 天守台3・5段目・ 本丸2段目検出状況	60
第14図 I層出土遺物(7)	20	第50図 天守台・東面平面図 天守台4段目・ 本丸2・3段目検出状況	61
第15図 II層出土遺物(1)	20	第51図 天守台・東面平面図 天守台5段目・ 本丸2~4段目検出状況	62
第16図 II層出土遺物(2)	21	第52図 天守台・東面平面図 天守台6段目・ 本丸4段目検出状況	62
第17図 III層出土遺物(1)	21	第53図 天守台・東面平面図 天守台7段目・ 本丸4段目検出状況	63
第18図 III層出土遺物(2)	22	第54図 天守台・東面平面図 天守台8段目・ 本丸2~4段目検出状況	64
第19図 III層出土遺物(3)	23	第55図 天守台・東面平面図 天守台8段目・ 本丸2~5段目検出状況	65
第20図 III層出土遺物(4)	24	第56図 天守台・東面平面図 天守台8段目・ 本丸2~6段目検出状況	66
第21図 III層出土遺物(5)	25	第57図 天守台・東面平面図 天守台9段目・ 本丸2~7段目検出状況	67
第22図 III層出土遺物(6)	26	第58図 天守台・東面平面図 天守台10段目・ 本丸3~8段目検出状況	68
第23図 III層出土遺物(7)	27	第59図 天守台・東面平面図 天守台11段目・ 本丸4~9段目検出状況	69
第24図 III層出土遺物(8)	28		
第25図 「御本城御差図」(寛文13年)(1673)に記された 井戸と埋没石垣	28		
第26図 IV層出土遺物(1)	28		
第27図 IV層出土遺物(2)	29		
第28図 IV層出土遺物(3)	30		
第29図 V層出土遺物(1)	30		
第30図 V層出土遺物(2)	31		
第31図 VI層出土遺物(1)	31		
第32図 VI層出土遺物(2)	32		
第33図 調査区全体図 上:石垣解体前 下:石垣解体後	35・36		
第34図 上:時期別石垣立面図 下:朱書・刻印分布図	37・38		
第35図 左:津軽弘前城之絵図(正保2年)(1645) 右:御本丸御絵図(寛文13年)(1673)	40		
第36図 V期石垣勾配模式図	42		

第60図	天守台・東面平面図 天守台12段目・ 本丸6～10段目検出状況	70	第100図	井戸跡4・5層出土遺物	111
第61図	天守台・東面平面図 天守台13段目・ 本丸7～11段目検出状況	71	第101図	井戸跡5層出土遺物	112
第62図	天守台・東面平面図 天守台14段目・ 本丸9～12段目検出状況	72	第102図	排水遺構1・2平面図(1)	114
第63図	天守台・東面平面図 天守台15段目・ 本丸10～13段目検出状況	73	第103図	排水遺構1・2平面図(2)	115
第64図	天守台・東面平面図 天守台15段目・ 本丸11～14段目検出状況	74	第104図	排水遺構1・2平面図(3)	116
第65図	天守台・東面平面図 天守台16段目・ 本丸12～15段目検出状況	75	第105図	排水遺構2断面図(1)	117
第66図	天守台・東面平面図 天守台17段目・ 本丸13～16段目検出状況	76	第106図	排水遺構2断面図(2)	118
第67図	天守台・東面平面図 天守台17段目・ 本丸14～17段目検出状況	77	第107図	排水遺構1・2断面図(3)	119
第68図	天守台・東面平面図 天守台17段目・ 本丸15～18段目検出状況	78	第108図	排水遺構1・2出土遺物	120
第69図	天守台・東面平面図 天守台17段目・ 本丸16～19段目検出状況	79	第109図	排水遺構2出土遺物(1)	121
第70図	天守台・東面平面図 天守台17段目・ 本丸17～19段目検出状況	80	第110図	排水遺構2出土遺物(2)	122
第71図	天守台・東面平面図 天守台17段目・ 本丸17～20段目検出状況	81	第111図	排水遺構2出土遺物(3)	123
第72図	埋没石垣平面図	82	第112図	排水遺構2出土遺物(4)	124
第73図	埋没石垣断面図(1)	83	第113図	排水遺構3平・断面図及び埋没石垣との 合成立面図	125
第74図	埋没石垣断面図(2)	84	第114図	排水遺構3断面図	126
第75図	埋没石垣断面図(3)	85	第115図	排水遺構3出土遺物	127
第76図	V期石垣帯コンクリート・間知石積み検出状況図	86	第116図	内濠平・立面図	130
第77図	V期石垣杭跡平・断面図	87	第117図	胴木断面図	131
第78図	暗渠1・2平・断面図	87	第118図	内濠断面図(1)	132
第79図	柱穴列平・断面図	87	第119図	内濠断面図(2)	133
第80図	杭跡平・断面図	88	第120図	内濠断面図(3)	134
第81図	I～III期石垣出土遺物	88	第121図	内濠断面図(4)	135
第82図	III・IV期石垣出土遺物	89	第122図	内濠断面図(5)	136
第83図	IV・V期石垣出土遺物	90	第123図	内濠断面図(6)	137
第84図	V期石垣出土遺物(1)	91	第124図	内濠断面図(7)	138
第85図	V期石垣出土遺物(2)	92	第125図	内濠出土遺物(1)	139
第86図	井戸跡検出状況図・石製井戸柱土台部 復元実測図	95	第126図	内濠出土遺物(2)	140
第87図	井戸跡平面図・石組立面図	96	第127図	内濠出土遺物(3)	141
第88図	埋没石垣・井戸跡・排水遺構1～3平面図	97・98	第128図	内濠出土遺物(4)	142
第89図	井戸跡断面図(1)	99	第129図	内濠出土遺物(5)・内濠石垣(慶長期) 出土遺物	143
第90図	井戸跡断面図(2)	100	第130図	土坑1平・断面図	144
第91図	井戸跡断面図(3)	102	第131図	土坑1出土遺物	144
第92図	井戸跡断面図(4)	103	第132図	地鎮遺構平・断面図	144
第93図	井戸跡断面図(5)	104	第133図	地鎮遺構出土遺物(1)	144
第94図	井戸跡1層出土遺物(1)	105	第134図	地鎮遺構出土遺物(2)	145
第95図	井戸跡1層出土遺物(2)	106	第135図	天守台北西側本丸平場櫓台確認調査平面図	146
第96図	井戸跡1～3層出土遺物	107	第136図	天守台櫓台確認調査平・断面図	147
第97図	井戸跡3層出土遺物(1)	108	第137図	遺構外出土遺物(1)	148
第98図	井戸跡3層出土遺物(2)	109	第138図	遺構外出土遺物(2)	149
第99図	井戸跡3・4層出土遺物	110	第139図	暦年較正年代	170
			第140図	暦年較正結果(1)	176
			第141図	暦年較正結果(2)	176
			第142図	弘前城跡出土遺物における蛍光X線分析 結果(1)	184
			第143図	弘前城跡出土遺物における蛍光X線分析 結果(2)	185
			第144図	弘前城跡出土遺物における蛍光X線分析 結果(3)	186
			第145図	弘前城跡出土遺物における蛍光X線分析 結果(4)	187

第146図	弘前城跡出土遺物における蛍光X線分析結果(5)……………	188
第147図	鉛同位体比を用いた産地推定の概念図(A式図)……………	190
第148図	鉛同位体比を用いた産地推定の概念図(B式図)……………	190
第149図	弘前城跡出土チキリの鉛同位対比(A式図)……………	190
第150図	弘前城跡出土チキリの鉛同位対比(B式図)……………	190
第151図	弘前城跡チキリと東北地方の鉾山跡(A式図)……………	190
第152図	弘前城跡チキリと東北地方の鉾山跡(B式図)……………	190
第153図	弘前城跡チキリと東北地方の鉾山跡拡大図(A式図)……………	190
第154図	弘前城跡チキリと東北地方の鉾山跡拡大図(B式図)……………	190
第155図	東北地方の鉾山跡……………	194
第156図	本丸東面に記載寸法のある絵図①……………	196

第157図	本丸東面に記載寸法のある絵図②……………	197
第158図	本丸東面に記載寸法のある絵図③……………	198
第159図	絵図記載寸法と本丸現況比較図……………	200
第160図	本丸南面・東面石垣勾配図……………	201
第161図	A-S14断面と「石垣秘伝之書」・「後藤家文書」から推定した石垣勾配比較図……………	202
第162図	寛文13年(1673)～延宝2年(1674)に本丸石垣が改変された場合(想定)と本丸石垣現況立面の合成図……………	203
第163図	寛文13年(1673)と延宝2年(1674)で本丸石垣の高さが同じ場合(想定)と本丸石垣現況立面の合成図……………	204
第164図	絵図に描かれた本丸辰巳櫓台の規模……………	205
第165図	本丸辰巳櫓台推定位置図……………	206
第166図	本丸東面石垣変遷模式図……………	208

挿 表 目 次

表1	周辺の遺跡等……………	12
表2	基本層序対応表……………	13
表3	石垣構築時期対応表……………	33
表4	石垣時期別属性表……………	39
表5	放射性炭素年代測定結果(1)……………	168
表6	放射性炭素年代測定結果(2)……………	169
表7	放射性炭素年代測定結果(3)……………	169
表8	放射性炭素年代測定結果(4)……………	173

表9	暦年較正結果……………	174
表10	放射性炭素年代測定結果(5)……………	175
表11	樹種同定結果(1)……………	178
表12	樹種同定結果(2)……………	179
表13	蛍光X線分析結果……………	181
表14	分析試料及び分析項目一覧……………	182
表15	鉛同位体比測定結果……………	189
表16	絵図本丸東面記載寸法一覧表……………	199

写 真 目 次

写真1	築石墨入れ状況……………	6
写真2	S1セクションの滑り面……………	14
写真3	A-13グリッドIV層滑り面……………	28
写真4	VII層の岩屑雪崩の可能性が指摘される風化礫……………	32
写真5	JトレンチI期石垣……………	33
写真6	III期石垣……………	40
写真7	ロハ角-2・2'のチキリ・ダボとロ-12の段差加工……………	41
写真8	IV期石垣……………	41
写真9	上部が玄能払いされた築石(イ-14-32)……………	42
写真10	V期石垣(天守台下の谷落とし積み)……………	43
写真11	大正4年(1915)の石垣修復状況……………	44
写真12	段切り検出状況……………	45
写真13	平成26年(2014)の井戸……………	93
写真14	昭和初期の井戸……………	93
写真15	昭和34年(1959)の井戸……………	93

写真16	石製井戸枠土台部出土状況……………	94
写真17	復元した石製井戸枠土台部……………	94
写真18	明治29年(1896)の石垣崩落で前面に押し出された内濠石垣(慶長期)背面の盛土と栗石……………	128
写真19	No.734出土状況……………	128
写真20	内濠石垣 上:慶長期 下:大正期……………	129
写真21	大正4年(1915)石垣修復……………	129
写真22	弘前城跡出土胴木と井戸枠材の樹種同定結果……………	178
写真23	弘前城跡本丸石垣出土木製品の樹種同定結果……………	179
写真24	試料外観……………	181
写真25	分析試料(1)……………	191
写真26	分析試料(2)……………	192
写真27	分析試料(3)……………	193
写真28	明治5年(1872)の天守台東面石垣拡大写真(弘前市相馬家所蔵)と櫓台推定位置の合成写真……………	207

出 土 遺 物 観 察 表

第1表	磁器観察表1……………	150
第2表	磁器観察表2……………	151
第3表	磁器観察表3……………	152
第4表	磁器観察表4……………	153
第5表	磁器観察表5……………	154
第6表	陶器観察表1……………	155
第7表	陶器観察表2……………	156

第8表	陶器観察表3……………	157
第9表	土師質土器観察表……………	157
第10表	土製品観察表……………	157
第11表	瓦観察表1……………	157
第12表	瓦観察表2……………	158
第13表	瓦観察表3……………	159
第14表	石製品観察表……………	159

第15表	木製品観察表 1	159	第23表	縄文土器観察表 1	164
第16表	木製品観察表 2	160	第24表	縄文土器観察表 2	165
第17表	木製品観察表 3	161	第25表	土製品(縄文)観察表	165
第18表	金属製品観察表 1	161	第26表	石器・石製品(縄文)観察表 1	165
第19表	金属製品観察表 2	162	第27表	石器・石製品(縄文)観察表 2	166
第20表	金属製品観察表 3	163	第28表	獣骨観察表	166
第21表	銭貨観察表	163	第29表	種子観察表	166
第22表	土師器(古代)観察表	163			

図 版 目 次

巻頭図版

巻頭図版 1

調査区全景(南から)

巻頭図版 2

明治29年(1896)の石垣崩落で滑り出した本丸石垣の根石と押し出された内濠石垣(南から)

本丸石垣南東隅角部根石検出状況(東から)

図版

図版 1	天守台天端・敷石検出状況(東から)	天守台天端上面遺物(No.61)出土状況(南から)
	天守台 2 段目検出状況(東から)	天守台 V 期石垣北東隅 4 段目イニ角-4 ダボ検出状況(西から)
図版 2	天守台天端~3 段目・本丸天端検出状況(南から)	天守台 V 期石垣 7 段目押石検出状況(北西から)
	天守台 17 段目・本丸 17~20 段目検出状況(南から)	図版 7
図版 3	A・B-1~5 グリッド基本土層 I 層堆積状況(北東から)	A-11・12 グリッド V 期石垣押石検出状況(北東から)
	A-11 グリッド基本土層 I 層堆積状況(北から)	天守台 V 期石垣イ-257 背面押石検出状況(北西から)
	天守台北西部基本土層 II 層堆積状況(東から)	天守台 V 期石垣北面検出状況(北から)
	埋没石垣背面基本土層 III・IV 層堆積状況(北東から)	天守台 V 期石垣北面下コンクリート基礎検出状況(北から)
	D トレンチ I 期石垣検出状況(東から)	V 期石垣築石矢穴痕
	E トレンチ本丸南東隅 I 期石垣検出状況(東から)	イ-443 背面 V 期石垣裏込め幅(北から)
	明治29年(1896)の石垣崩落で滑り出した天守台下の I 期石垣根石検出状況①(南東から)	V 期石垣間知石積み検出状況(北西から)
	明治29年(1896)の石垣崩落で滑り出した天守台下の I 期石垣根石検出状況②(北から)	V 期石垣帯コンクリート検出状況(南東から)
図版 4	J トレンチ根切り溝プラン検出状況(西から)	図版 8
	E トレンチ胴木 1 検出状況(東から)	V 期石垣杭跡セクション(南から)
	E トレンチ胴木 2 検出状況(東から)	暗渠 1 検出状況(東から)
	E トレンチ胴木 3 検出状況(南東から)	I 期 or III 期石垣柱穴列検出状況(北東から)
	H トレンチ胴木 4 検出状況(南東から)	I 期 or III 期石垣杭跡検出状況(南から)
	G トレンチ胴木 5 検出状況(北東から)	S 1 セクション(4~6 段目)(北東から)
	イ-444 下胴木 6 検出状況(西から)	S 1 セクション(8~10 段目)(北から)
	D トレンチ胴木 7 検出状況(東から)	S 1 セクション(11・12 段目)(北から)
図版 5	D トレンチ胴木 8 検出状況(東から)	S 1 セクション(16~18 段目)(北から)
	D トレンチ胴木 9 検出状況(東から)	図版 9
	D トレンチ胴木 10・11 検出状況(北東から)	S 1 セクション(20・21 段目)(北東から)
	J トレンチ胴木 12 検出状況(南から)	S 2 セクション(3~5 段目)(北から)
	I 期石垣築石矢穴痕	S 2 セクション(5~7 段目)(北から)
	I 期石垣イ-610 背面裏込め幅(南から)	S 2 セクション(7・8 段目)(北から)
	埋没石垣検出状況(南西から)	S 2 セクション(18・19 段目)(北から)
	イ-596 加工状況(東から)	S 3 セクション(2~4 段目)(北から)
図版 6	III 期石垣胴込め検出状況(南から)	S 3 セクション(6~8 段目)(北から)
	III 期石垣築石矢穴痕	S 3 セクション(8~10 段目)(北から)
	III 期石垣イ-12-89 背面裏込め幅(南から)	図版 10
	天守台天端 IV 期石垣南西角石口八角-1 検出状況(北東から)	S 3 セクション(11~13 段目)(北東から)
	天守台天端 IV 期石垣南西角石口八角-1	S 3 セクション(16~18 段目)(北から)
		S 4 セクション(2~4 段目)(北から)
		S 4 セクション(6~8 段目)(北から)
		S 4 セクション(12~14 段目)(北から)
		S 4 セクション(15・16 段目)(北から)
		S 4 セクション(16・17 段目)(北から)

- S 6セクション(1~3段目)(南から)
- 図版11 井戸跡石製井戸枠セクション(南西から)
井戸跡東西セクション①(南から)
井戸跡東西セクション②(南から)
井戸跡南北セクション(東から)
井戸跡東側石組(1~3段目)検出状況(西から)
井戸跡東側石組(3~5段目)検出状況(西から)
井戸跡掘削状況①(西から)
井戸跡北側角材検出状況(西から)
- 図版12 井戸跡西側土留め板検出状況①(東から)
井戸跡西側土留め板検出状況②(北東から)
井戸跡西側土留め板撚糸圧痕検出状況(東から)
井戸跡北側土留め板検出状況①(南東から)
井戸跡北側土留め板検出状況②(南から)
井戸跡掘方北側板留め材検出状況(東から)
井戸跡P 2 検出状況(東から)
井戸跡P 2セクション(東から)
- 図版13 井戸跡P 5セクション(東から)
井戸跡P 5完掘状況(東から)
井戸跡P 1~4完掘状況(南から)
井戸跡掘削状況②(南東から)
井戸跡木製井戸枠検出状況(南から)
井戸跡木製井戸枠遺物出土状況(東から)
排水遺構 1 検出状況(北から)
排水遺構 1 完掘状況(北から)
- 図版14 排水遺構 1・2(石組桁部)完掘状況(南から)
排水遺構 2(暗渠部)セクション(南西から)
排水遺構 2(暗渠部底石)解体状況(東から)
排水遺構 2(暗渠部・蛇口部)検出状況(北東から)
- 図版15 排水遺構 2(暗渠部)底石検出状況(東から)
排水遺構 3 検出状況①(東から)
排水遺構 3 検出状況②(南東から)
排水遺構 3東西セクション①(南から)
- 図版16 排水遺構 3東西セクション②(南から)
天守台地鎮遺構検出状況(北東から)
天守台地鎮遺構壺(No.756・757)出土状況(北から)
天守台11段目解体状況(東から)
石垣解体終了状況(南東から)
- 図版17 内濠石垣(慶長期・大正期)検出状況(南から)
内濠石垣(慶長期・大正期)南端検出状況(東から)
内濠石垣(慶長期)検出状況(東から)
Eトレンチ内濠石垣(慶長期)背面盛土検出状況(南から)
Fトレンチ内濠石垣(慶長期)検出状況(北東から)
Gトレンチ内濠石垣(慶長期)検出状況(東から)
Gトレンチ内濠石垣(慶長期)上段部崩落状況(北から)
- 図版18 Iトレンチ内濠石垣(慶長期)検出状況(東から)
Iトレンチノミ切り加工が施された内濠石垣(慶長期)の築石(東から)
Eトレンチ内濠石垣(慶長期)根切り溝検出状況(東から)
- Fトレンチ内濠石垣(慶長期)根切り溝検出状況(北東から)
Eトレンチ内濠石垣(大正期)検出状況①(南東から)
Eトレンチ内濠石垣(大正期)検出状況②(東から)
Jトレンチ内濠石垣(大正期)検出状況①(南から)
Jトレンチ内濠石垣(大正期)検出状況②(南から)
- 図版19 Jトレンチ大正4年(1915)の石垣修復工事でコンクリートが付着したI期石垣築石(南から)
Jトレンチ大正4年(1915)の石垣修復工事でノミ切り加工が施されたI期石垣築石(南から)
Jトレンチ内濠石垣(大正期)セクション(東から)
Eトレンチ内濠遺物出土状況(北から)
Eトレンチ内濠セクション(南から)
Eトレンチ内濠濠底構築土建築部材出土状況(南西から)
Eトレンチ内濠濠底構築土出土建築部材北端部接写(北から)
Eトレンチ内濠濠底構築土出土建築部材南端部接写(西から)
- 図版20 Dトレンチ調査終了状況(北東から)
Eトレンチ調査終了状況(北東から)
Fトレンチ漆器(No.728)出土状況(南から)
Fトレンチ調査終了状況(南東から)
Gトレンチ調査終了状況(南から)
Hトレンチ調査終了状況(北東から)
Iトレンチ調査終了状況(東から)
Jトレンチ調査終了状況(南から)
- 図版21 I層出土遺物(1)
- 図版22 I層出土遺物(2)
- 図版23 I層出土遺物(3)
- 図版24 I~III層出土遺物
- 図版25 III層出土遺物(1)
- 図版26 III層出土遺物(2)
- 図版27 III・IV層出土遺物
- 図版28 IV~VI層出土遺物
- 図版29 VI層、I~III期石垣出土遺物
- 図版30 III~V期石垣出土遺物
- 図版31 V期石垣出土遺物
- 図版32 井戸跡1層出土遺物
- 図版33 井戸跡1~3層出土遺物
- 図版34 井戸跡3・4層出土遺物
- 図版35 井戸跡4・5層、排水遺構1・2出土遺物
- 図版36 排水遺構2出土遺物(1)
- 図版37 排水遺構2出土遺物(2)
- 図版38 排水遺構2・3、内濠出土遺物
- 図版39 内濠出土遺物(1)
- 図版40 内濠出土遺物(2)
- 図版41 内濠、内濠石垣(慶長期)、土坑、地鎮遺構出土遺物
- 図版42 遺構外出土遺物

第1章 経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

昭和20年代中頃には、本丸東面石垣の孕み出しが指摘されている(第1図)。弘前市(以下、市)は、昭和58年(1983)5月に発生した日本海中部地震を契機に文化庁の指導を受け、翌年度(1984)から平成14年度(2002)にかけて定点観測を実施している。その結果、石垣の変位が進行していること、天守北東隅が約23cm沈下していること等が明らかとなった。また、平成12・15年度(2000・2003)に実施した石垣概要診断調査結果では、石垣の孕み出しが進行した場合、天守を巻き込んだ石垣崩落の恐れがあり、積直しの必要があると診断された。これを受け、市は平成16年度(2004)に石垣修理計画を策定し、翌年度(2005)策定の「史跡津軽氏城跡保存管理計画」でも石垣修理が整備計画に盛り込まれた。平成19年度(2007)からは国の補助事業として石垣の変位測量、地質調査、地下水位観測等の基礎調査を継続的に実施している。平成20年度(2008)には、石垣の解体範囲や修理方法を検討する「弘前城跡本丸石垣修理委員会」(以下、修理委員会)を組織している。平成21年度(2009)には、弘前城跡の長期の保存整備・活用の方針を定めた「史跡津軽氏城跡弘前城跡整備計画」が策定され、本丸東面石垣については、「修理委員会からの指導を受けながら、必要な調査と修理工事を計画的に実施する。」と明記されている。平成23年度(2011)には、石垣に載る天守を巻き込んで崩落する危険性があると修理委員会で判断され、解体修理が決定し、翌年度(2012)には、修理委員会の下部組織として石垣修理に関わる発掘調査の調査内容や方法等について検討・指導する「弘前城跡本丸石垣発掘調査委員会」(以下、発掘調査委員会)を組織した。

平成25年度(2013)には、石垣修理に係わる本丸東端部平場の発掘調査に着手し、平成28年度(2016)からは、石垣解体修理工事に着手した。



第1図 昭和25年8月24日 陸奥新報

第2節 調査経過

石垣解体修理に先立ち、平成24年度(2012)から平成28年度(2016)にかけて近代の積直し範囲の把握、石垣背面における遺構の有無、根石・石垣構造の確認等を目的に発掘調査を実施したほか、平成23・24年度(2011・2012)には石垣石材の供給地とされる如来瀬石切丁場跡と兼平石切丁場跡の測量調査を実施している。なお、これらの調査成果については「史跡津軽氏城跡(弘前城跡)弘前城本丸発掘調査概報Ⅰ～Ⅳ」(2014～2017)、「史跡津軽氏城跡(弘前城跡)弘前城本丸発掘調査報告書」(2018)、「史跡津軽氏城跡(弘前城跡)弘前城本丸石垣解体調査概報Ⅰ」(2019)を参照されたい。

調査が本格化するのは石垣解体が始まる平成29年度(2017)からである。石垣解体工事と並行して、石垣とその背面に位置する遺構の調査を2ヶ年にわたって実施し、解体範囲における石垣の構造や孕み出しの原因を把握したほか、石垣背面では井戸跡、排水遺構、埋没石垣等の遺構を検出するとともに、構築時期や特徴等が明らかとなった。しかし、平成30年度(2018)の修理委員会において「解体工事は終了したものの、解体範囲外に位置する根石を含めた石垣下部の構造が明らかになっていない状況で、安定した石垣を積直すことはできない」との指導を受け、令和元年度(2019)には、石垣下部の構造と内濠の土層堆積状況を把握するために内濠調査を実施した。その結果、天守台東面石垣の前面で2～3段積まれた石垣を検出したものの、調査範囲が狭小で、詳細が判然としないため、令和2年度(2020)に調査区を東側へ拡張したところ、検出した石垣は絵図や文献に残されていない築城時の腰巻石垣であることが判明したほか、明治29年(1896)の石垣崩落状況等が明らかとなった。

これまでの調査及び工事等の概要は以下の通りである。※下線は発掘調査

平成19年度(2007)・・・基礎調査開始

平成22年度(2010)・・・石垣カルテ作成

平成23年度(2011)・・・石垣カルテ追加調査(如来瀬石切丁場跡の現地測量)

平成24年度(2012)・・・弘前城跡本丸石垣試掘調査、石垣カルテ追加調査(如来瀬石切丁場跡・兼平石切丁場跡の現地測量)、天守曳屋基本設計

平成25年度(2013)・・・石垣修理に係る弘前城跡本丸東端部平場発掘調査(1次)、天守曳屋実施設計、石垣修理基本設計、石垣修理に係る新補石材調査

平成26年度(2014)・・・石垣修理に係る弘前城跡本丸東端部平場発掘調査(2次)、石垣修理に係る内濠埋め立て工事、天守基礎調査

平成27年度(2015)・・・石垣修理に係る弘前城跡本丸東端部平場発掘調査(3次)、天守曳屋工事、石垣修理実施設計

平成28年度(2016)・・・石垣修理に係る弘前城跡本丸東端部平場発掘調査(4次)、本丸東面石垣根石発掘調査、石垣解体修理準備工(築石への番付・墨入れ等)

平成29年度(2017)・・・石垣解体工事に伴う発掘調査、石垣解体工事

平成30年度(2018)・・・石垣解体工事に伴う発掘調査、石垣解体工事

令和元年度(2019)・・・石垣下部および内濠追加調査、石垣積直し実施設計

令和2年度(2020)・・・石垣下部および内濠追加調査、櫓台石垣確認調査

第3節 調査要項(平成29年～令和2年度)

1. 調査目的

史跡津軽氏城跡(弘前城跡)における本丸東面石垣の解体修理に伴い、遺構の調査を行う。

2. 史跡名及び所在地

史跡名 史跡津軽氏城跡(弘前城跡)

所在地 青森県弘前市大字下白銀町1番地

3. 発掘調査期間及び面積

平成29年度(2017) 4月9日～12月28日 1,020㎡

平成30年度(2018) 4月7日～12月12日 1,050㎡

令和元年度(2019) 5月13日～7月29日 360㎡

令和2年度(2020) 5月11日～7月29日、12月14日～12月18日 203㎡

4. 指導機関 ○は石垣修理現場アドバイザー兼務

・弘前城跡本丸石垣修理委員会

委員長 田中 哲雄(元文化庁主任文化財調査官：石垣・城郭)

副委員長 関根 達人(弘前大学教授：考古)○

委員 金森 安孝(放送大学非常勤講師：石垣)○

委員 北垣聰一郎(石川県金沢城調査研究所名誉所長：石垣・城郭)

委員 北野 博司(東北芸術工科大学教授：考古)○

委員 千田 嘉博(奈良大学教授：城郭)

委員 瀧本 壽史(元弘前大学教授：歴史)(平成30年4月から)

委員 西形 達明(関西大学名誉教授：土木工学)○

委員 福井 敏隆(弘前市文化財審議委員長：歴史)

委員 麓 和善(元名古屋工業大学教授：建築)

委員 長谷川成一(弘前大学名誉教授：歴史)(平成30年3月まで)

委員 柳沢 栄司(東北大学名誉教授：土木工学)(平成31年4月まで)

・弘前城跡本丸石垣発掘調査委員会

委員長 関根 達人(弘前大学教授：考古)

副委員長 福井 敏隆(弘前市文化財審議委員長：歴史)

委員 金森 安孝(放送大学非常勤講師：石垣)

委員 上條 信彦(弘前大学教授：考古)

委員 柴 正敏(弘前大学名誉教授：地質)

5. 調査機関 弘前市都市整備部公園緑地課弘前城整備活用推進室(平成30年度まで都市環境部)

6. 調査組織

平成29年度(2017)

(事務局)公園緑地課長(理事兼務) 古川 勝

弘前城整備活用推進室長 神 雅昭

総括主査 笹森 康司
主 査 横山 幸男
主 事 福井 翔子
(発掘担当) 主 事 今野沙貴子
主 事 蔦川 貴祥
主 事 福井 流星
(埋蔵文化財嘱託員) 虻川尚導 石郷岡幹人 菊地秀 齊藤一秀 對馬清也 津嶋元氣
(発掘作業員) 五十嵐實 岩谷崇徳 木村政廣 櫛引敏嗣 齋藤泰平 佐藤幸博 下山一男
清野淳子 田中康浩 中川修造 中山紀子
(整理作業員) 奥崎恵美子 櫛引敏嗣 佐藤幸博 白戸謙二 中山紀子 藤田扶美子
平成30年度(2018)

(事務局)公園緑地課長 神 雅昭
弘前城整備活用推進室長 古川 勝
総括主査 笹森 康司
総括主査 横山 幸男
主 事 一戸 夕貴
技 師 新山 武寛
(発掘担当) 主 査 蔦川 貴祥
主 事 今野沙貴子
主 事 福井 流星
(埋蔵文化財嘱託員) 虻川尚導 石郷岡幹人 菊地秀 相馬惣子 對馬清也 成田久美子
山田友里子
(発掘作業員) 五十嵐實 岩谷崇徳 奥崎恵美子 木村政廣 櫛引敏嗣 久保田慶子
佐藤恵子 佐藤幸博 柴田和彦 清野淳子 中川修造 中山紀子 藤田扶美子
(整理作業員) 奥崎恵美子 木村仁美 佐藤幸博 福井正子 藤田扶美子

令和元年度(2019)

(事務局)公園緑地課長兼
弘前城整備活用推進室長 神 雅昭
総括主査 笹森 康司
総括主査 横山 幸男
主 事 今野沙貴子
主 事 一戸 夕貴
技 師 新山 武寛
(発掘担当) 主 査 蔦川 貴祥
主 査 福井 流星
(埋蔵文化財嘱託員) 虻川尚導 石郷岡幹人 菊地秀 相馬惣子 對馬清也 山田友里子

(発掘作業員) 五十嵐實 櫛引敏嗣 佐藤幸博 清野淳子 中川修造 中山紀子

(整理作業員) 奥崎恵美子 櫛引敏嗣 佐藤幸博 柴田和彦 中山紀子

令和2年度(2020)

(事務局)公園緑地課長兼

弘前城整備活用推進室長 神 雅昭

総括主査 関 剣太郎

総括主査 横山 幸男

主 事 今野沙貴子

主 事 一戸 夕貴

技 師 新山 武寛

(発掘担当) 主 査 福井 流星

(会計年度任用職員) 虻川尚導 石郷岡幹人 菊地秀 相馬惣子 對馬清也 山田友里子

(発掘作業員) 五十嵐實 木村政廣 櫛引敏嗣 中川修造 中山紀子

(整理作業員) 五十嵐實 大瀬歩 奥崎恵美子 木村政廣 櫛引敏嗣 佐藤幸博 中川修造
中山紀子

第4節 調査方法

グリッドは、平成25～28年度(2013～2016)に本丸東端部平場調査で設定した5m四方のものを用いたが、東西方向については石垣解体に伴いグリッド(C・D)を追加している。基準点は平面直角座標系第X系座標に準拠し、X軸=67515.129、Y軸=-31233.723である。なお、グリッド名は東西軸にアルファベット(A～D)、南北軸に算用数字(1～17)を用いている。天守台ではグリッドを設定せず、北東・北西・南東・南西エリアに調査区を4分割している(第2図)。

石垣解体は現況を図面・写真で記録後、東面では解体範囲南端から北端、南面では西端から東端に向かい1石ずつ行い、1段解体ごとにUAVによる空中写真撮影を実施し、オルソ写真を作成している。

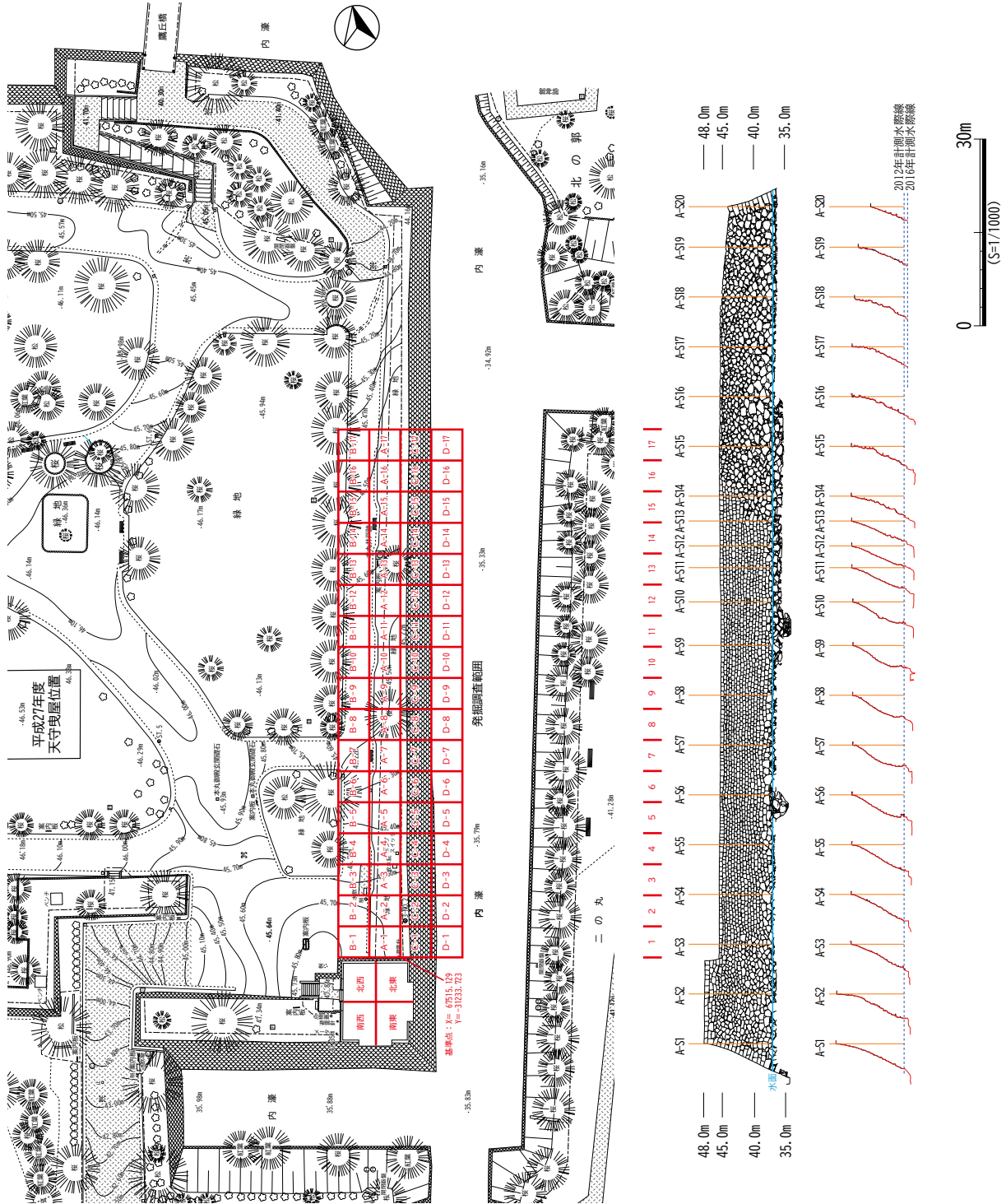
また、解体予定範囲の築石及び間詰石については、積直しを容易にするため、石材番号と50cm間隔の方眼墨入れを平成28年度(2016)に実施している(写真1)。石材番号は先頭に天守台東面及び本丸東面石垣では「イ-」、天守台南面及び本丸南面石垣では「ロ-」、天守台西面石垣では「ハ-」、天守台北面石垣では「ニ-」を付し、野面石の乱積み及び野面石の谷落とし積みの築石には、それぞれ南から北、東から西、北から南、東から西の順に天端から下段へ向かい算用数字を付し、東面の割石の布積みの築石には天端からの段数が把握できるよう「イ-O-O」とした(ex:イ-5-14は、本丸東面石垣の割石の布積み部分で、天端から5段目、南から14番目の築石を示す)。また、角石については、面する方位の「イ・ロ・ハ・ニ」に角を付け、天端から下段に向かい算用数字を付した(ex:イロ角-13は南東隅角部の天端から13段目の角石を示す)。

内濠では重機で現代のヘドロ層を除去後、人力による堆積層の掘削と遺構検出を行ったほか、必要に応じてトレンチを設定し、石垣下部構造と内濠の土層堆積状況の把握に努めた。



写真1 築石墨入れ状況

調査は解体前の石垣の状況を図面・写真で記録し、解体後は石材等の特徴を記録した石材カルテを1石ごとに作成している。遺構の調査は人力で行い、出土遺物は状況に応じて写真撮影や出土状況を図化し取り上げた。石垣及び遺構平・断面図はトータルステーションを用いて作成した。写真撮影は適宜行い、35mmモノクロームフィルム、カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラを使用した。

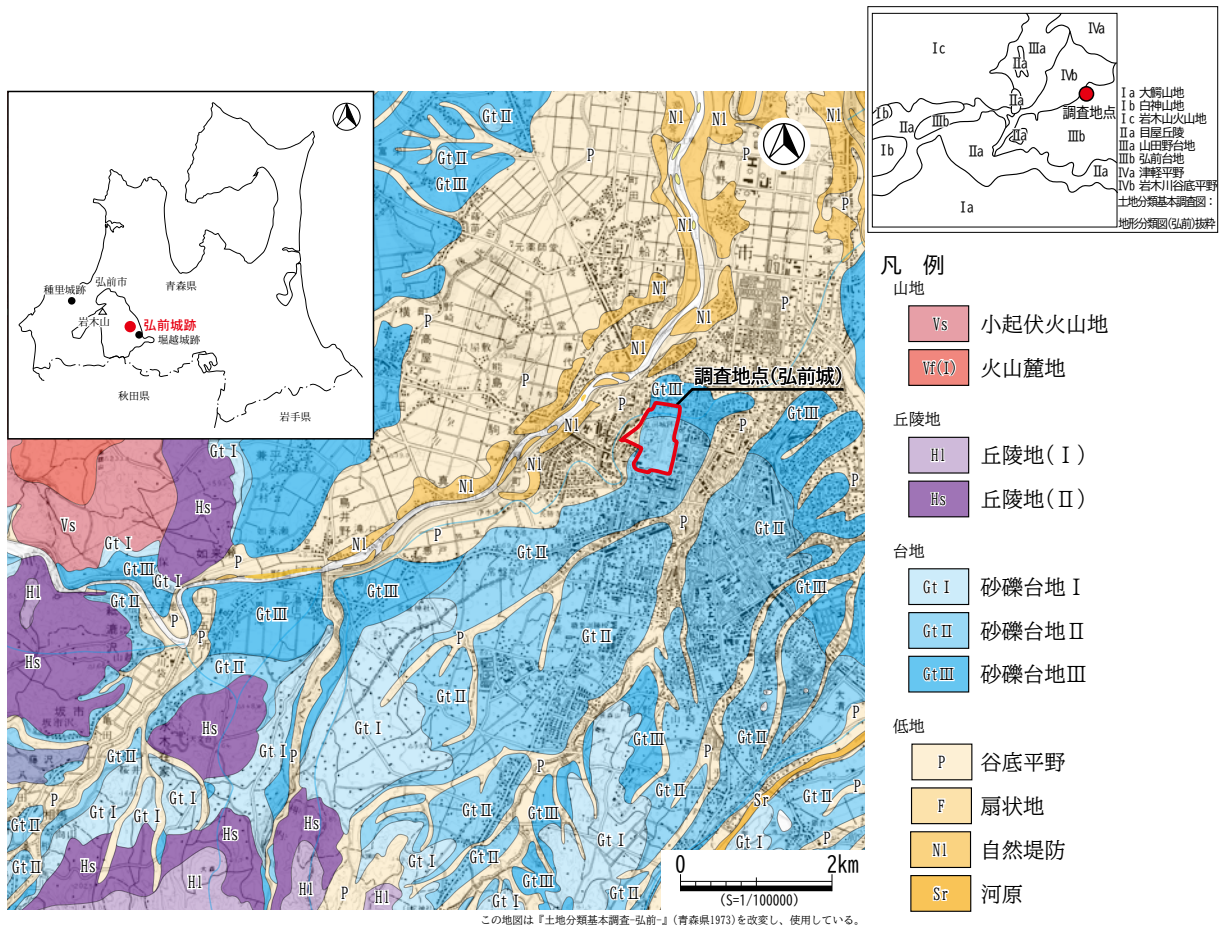


第2図 調査区設定図

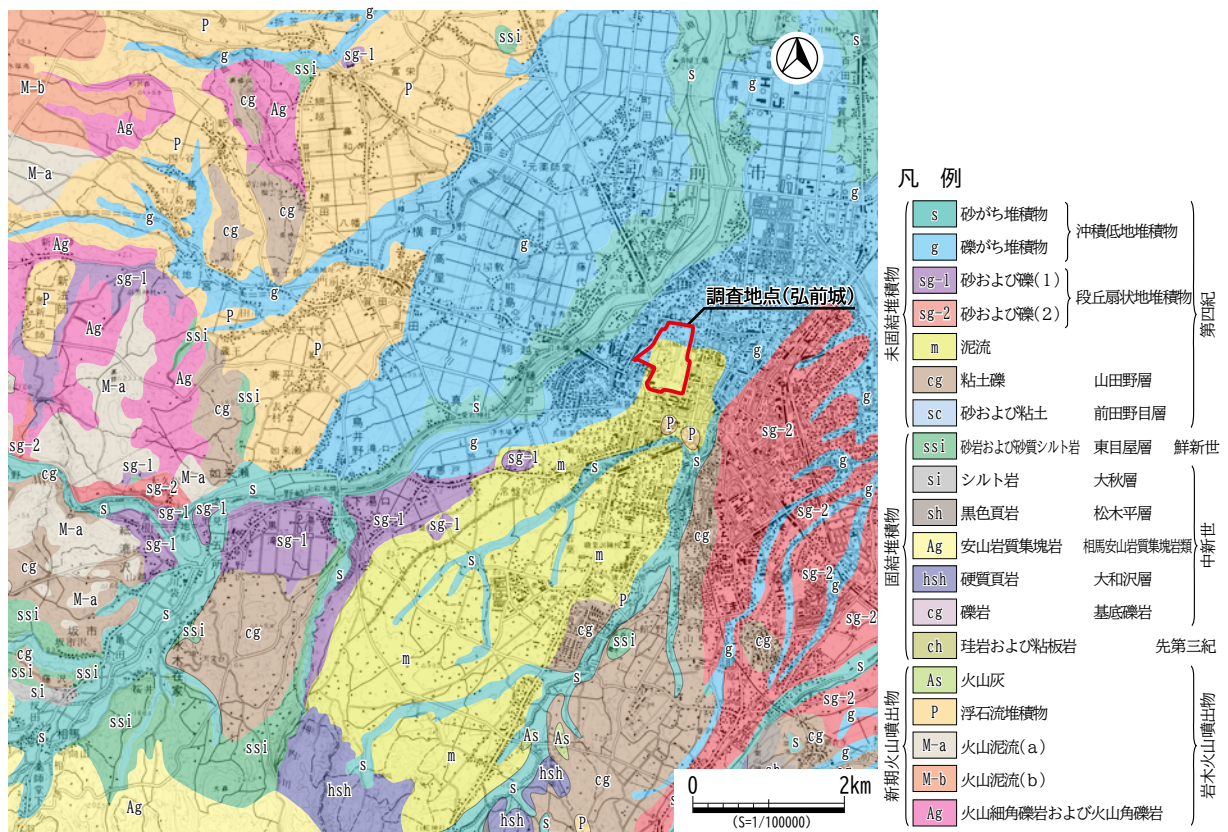
第2章 弘前城跡の概要

第1節 地理的環境

弘前市は青森県の西部に広がる津軽平野南部に位置し、東側を奥羽山脈、西側を秀峰岩木山と世界遺産の白神山地で囲まれた盆地状の地形を呈する。弘前市街地は白神山地の雁森岳を源とする岩木川と坂梨峠西麓を源とする平川に挟まれており、弘前台地と岩木川谷底平野が複雑に入組んでいる(第3図)。弘前台地は砂礫台地のGt I～III(上～下位)に区分されており、弘前城の大部分は弘前台地西側縁辺部中位(Gt II)の標高40～47m付近に位置するが、北側から西側に位置する四の丸及び西の郭は岩木川谷底平野に位置し、標高は29～30mである。表層地質は第四紀未固結堆積物であり、台地部が「泥流」、谷底平野部が「礫がち堆積物」に分類される(第4図)。山口義伸は露頭観察及び地形判読、ボーリング資料の解析で弘前市街地から岩木川流域にかけての地形分類を行い、構成層から上位より桔梗野面・松原面・原ヶ平面・城東面・広野面・境関面・湯口面・清野袋面・駒越面・城西面の10面に細分しており、弘前城の所在する下白銀町は軽石質砂層と砂礫等の氾濫性堆積物で形成された原ヶ平面に位置する。また、同町東奥義塾跡地(現弘前市立観光館)では地表下約9m地点で厚さ4mの灰褐色軽石質砂層が堆積するとともに、下位の砂礫層直下には層厚20m以上に及ぶ細粒砂岩が堆積しており、下部N値が50以上の固結状態で、地表下27m付近に貝殻が含まれることから基盤層と判断されている(山口2001)。



第3図 遺跡周辺の地形分類図



第4図 遺跡周辺の表層地層図

第2節 歴史的環境

(1) 弘前城の歴史

弘前城は標高29～46mの地点に位置する平山城で、面積は約49haである。築城当初は本丸、北の郭、二の丸、三の丸、四の丸、西の郭、西外の郭(現馬屋町)の7つの曲輪で構成されていたが、西外の郭は後に城内から外され、城下町の一部となり、以後、6つの曲輪で構成されている。本丸は石垣、その他の曲輪は全て土塁で囲まれており、東、南、北の三方は三重の濠が巡らされ、西側は溜池と西濠で守られている。

その歴史は、弘前藩初代藩主津軽為信が慶長8年(1603)に新城の建設を計画し、「高岡」の地に町割を開始したことに始まる。為信は慶長12年(1607)に京都で没するが、二代藩主信枚がその遺志を継ぎ、慶長16年(1611)には「高岡城」が完成し、5月には家臣団を引き連れ堀越城より移ったとされ、以後、明治を迎えるまでの260年間政庁として機能する。慶長19年(1614)には城南の堀の役目を果たす南溜池が完成し、翌年の元和元年(1615)には城郭よりも高く城を見下ろすとの理由で城の南側にある茂森山が削平され、長勝寺門前と茂森山の間に堀と土塁、枳形を設け、城下西南の防衛施設である「長勝寺構」が完成する。慶安2年(1649)には大火を契機に寺町の寺院が南溜池の南側に移され、「新寺構」が形成される。

築城当初、本丸南西隅に5層の天守が建てられたが、寛永4年(1627)の落雷で焼失したとされる。翌年には地名が「高岡」から「弘前」に改名され、それに伴い「高岡城」も「弘前城」と呼ばれるようになった。弘前城の姿が大きく変わるのは四代藩主信政の時代で、二の丸、三の丸等にあった武家屋敷の郭外移転、本丸東面石垣の築足し、松の植樹等を行っている。その後、文化2年

(1805)には、北方警護の功績が幕府に認められ、領地高が4万6千石から7万石に高直りし、更に文化5年(1808)には東西蝦夷地の恒久的な警備が命じられ、その負担を勘案して10万石へと高直りした。九代藩主寧親はこれを機に、本丸辰巳櫓、同未申櫓、同戌亥櫓の再建を申請し、辰巳櫓改築の許可を得て文化7年(1810)に本丸南東隅に現天守を造営している。明治4年(1871)には、廃藩置県により近世城郭の役目を終え、兵部省の管轄となる。明治6年(1873)には、廃城令が出されるが、存城処分となり、天守、櫓等は残置され、明治28年(1895)には、弘前公園が開園される。昭和27年(1952)には、「天守・櫓・門を始め遺構がよく遺存していて旧観を伝えるに十分であり、惣構も亦概ねよく旧態をとどめていて近世における城郭の規模を示すものとして価値ある遺跡」と評価され、史跡に指定されている。

(2)本丸東面石垣の歴史と修復履歴

築城当初、本丸石垣の石材は長勝寺南西の石森や岩木山麓に所在する兼平の石切丁場から採取したほか、大光寺城(平川市)、黒石城(黒石市)等の中世城郭から運び込まれたことが「津軽一統志」等に記されている。本丸石垣は野面石の乱積みで積まれた高石垣であるが、東面中央部だけは4～7段程度の腰巻石垣であり、それより上部には石垣が築かれず、「土羽」の状態であった(第5図)。



第5図 「御本丸御絵図」(本丸東面部分)寛文13年(1673) 弘前市立弘前図書館所蔵

「土羽」に石垣を築いたのは四代藩主信政である。元禄7年(1694)、信政は幕府の許可を得て、本丸南西隅に位置する未申櫓の櫓台石垣の修理に着手し、翌年より本丸東面石垣の築き足しを開始する。工事は冷害による飢饉の影響で一時中断したものの、元禄12年(1699)5月に終了し、本丸を囲む石垣が完成した。築き足された元禄期の石垣は、合端加工された割石を用い、布積みで積まれており、石材は如来瀬の石切丁場から採取したことが「弘前藩庁御国日記」に記されている。

文化6年(1809)には、現天守の造営に伴い、本丸南東隅に天守台石垣が築かれている。天守台石垣は切石の布積みで積まれており、天端ではイカの形状をした角石を配置し、チキリ・ダボの金属製連結具を多用する等、弘前城独自の工法が用いられていることが今回の調査で明らかとなった。

明治27・29年(1894・1896)には天守台北側付近の石垣が崩落する。明治27年(1894)の崩落は間もなくして修復されるが、明治29年(1896)の崩落では、天守倒壊を回避するため、翌年に大工棟梁の堀江佐吉が中心となり、本丸内部に天守を曳家したものの、実際に石垣の修復工事が行われるのは、大正天皇が陸軍特別大演習で来弘する直前の大正4年(1915)7～10月のことであり、その間の19年間は修復されないままの状態が続いた。同崩落の資料は、多く残されており、その詳細が明らかである。崩落箇所は天守台北側の石垣で、長さにして十間半(約19.1m、1間=6尺)の石垣が崩落し、その北側六間(約10.9m)と天守台の石垣が大きく変形している(第34図)。当時の新聞記事によると、工事範囲は長さ四十三間(約78.3m)で、入札により堀江佐吉の長男彦三郎が請負ったとされる。工事は、本丸平場では旧材を用い、元禄期石垣と同様、割石の布積みで積まれるが、天守台下では築城時の積み方である野面石の乱積みではなく、野面石の谷落とし積みで積み、現在の姿となった。

(3) 周辺の遺跡(第6図、表1)

【旧石器時代】市内の当該期遺跡は、彫刻刀・削器・スクレイパー等の石器が11点出土した大森勝山遺跡(世界遺産)と搔器が1点出土した大沢遺跡のみで、弘前城周辺では確認されていない。

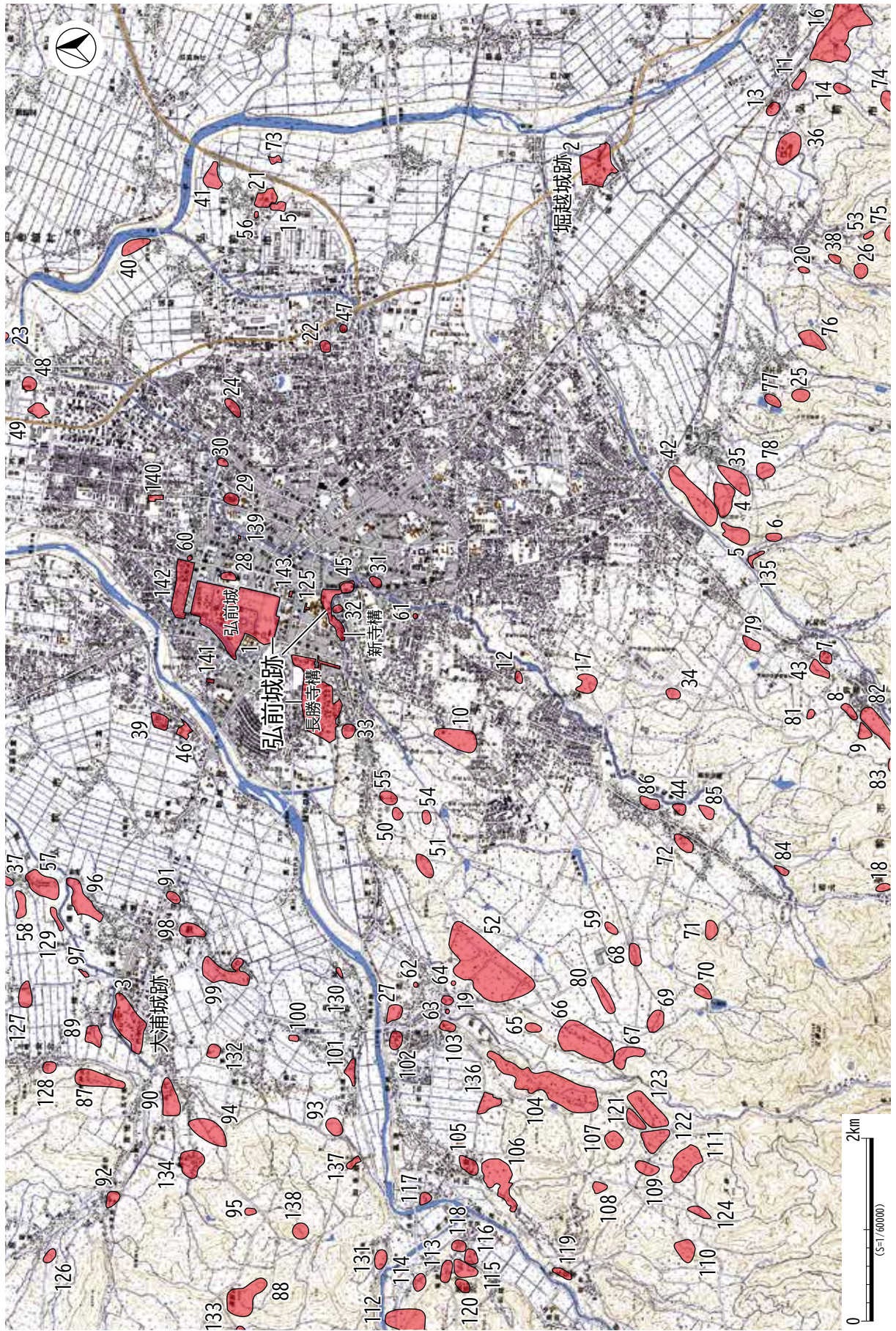
【縄文時代】周辺における当該期の遺跡は、草創期の新寺町遺跡(32)、縄文時代中期～晩期の和徳町遺跡(30)、蔵主町遺跡(28)、縄文時代晩期の緑町遺跡(29)等の散布地がある。

【弥生時代】市内には弥生時代前期の日本最北の水田跡を検出したことで著名な砂沢遺跡のほか、集落跡や散布地等16遺跡が登録されているものの、旧石器時代同様、弘前城周辺では確認されていない。

【古代・中世】津軽家に所縁のある遺跡としては大浦城跡(3)、堀越城跡(2)が挙げられる。大浦城跡は、安藤氏の抑えとして種里城(鯉ヶ沢町)に配置された南部光信(のちの大浦光信)が、文亀2年(1502)に津軽進出の拠点として築いた大浦氏の居城である。城郭は、岩木川支流の後長根川右岸に位置し、6つの曲輪で構成された平城で、周囲は土塁と堀で囲まれている。大浦為信(のちの津軽為信)が堀越城に拠点を移すと城番が置かれるだけとなり、その後、元和の一国一城令により廃城となるが、本丸・二の丸・西の丸の土塁は残され、弘前城の詰城として西の丸に火薬庫が建てられたとされる。堀越城跡は、大浦城の城主であった為信が文禄3年(1594)に中世館を改修した城郭で、弘前藩二代藩主信枚が高岡城(のちの弘前城)へ拠点を移す慶長16年(1611)まで津軽氏の居城として栄えた。城郭は、6つの曲輪で構成された平城で、「本丸」を中心に曲輪が配置される点、堀と土塁の組み合わせによる「喰違虎口」や「折り」等近世的な築城技法が多くみられる。その他、後長根川下流域には、三重の堀跡が検出された油伝(1)遺跡(57)、平川流域には平安時代後期の集落跡でベンガラが塗布された甗や鉄製品が多量に出土した早稲田遺跡(15)、15～16世紀の館跡である境関館(40)、大浦氏が大浦城の支城の一つとして築いたとされ、発掘調査で橋脚跡が検出されている福村城跡(21)、弘前台地上には、出間館(45)、螺喰遺跡(22)等の城館や祭祀跡があり、弘前城周辺では、和徳城の一郭と推定される和徳稻荷神社や藤代館(39)が存在する。

【近世】周辺には近世鍛冶遺構が検出された城下町本町遺跡(125)、江戸から帰藩した平清水三右衛門が元禄5年(1692)に開窯し、18世紀まで操業したとされる平清水窯跡(60)、市内最古の庭園と推定され、発掘調査で池泉等が検出されている津軽山革秀寺庭園遺跡(46)、近世の溝跡や竪穴遺構等が多数検出されている蔵主町遺跡(28)のほか、最勝院五重塔(45内)、東照宮本殿(139)、弘前八幡宮本殿・唐門(140)、誓願寺山門(141)等の重要文化財や国選定重要伝統的建造物群保存地区に選定されている弘前市仲町伝統的建造物群保存地区(142)が存在する。

なお、弘前城に石材を供給したと文献に記されている石切丁場は「石森」、「兼平」、「如来瀬」等があるが、現時点で所在が明確な石切丁場は兼平石切丁場跡(138)と如来瀬石切丁場跡(137)のみである。いずれも弘前城より6km程度離れた岩木山麓に所在し、採取される石材は輝石安山岩であるが、前者は板状節理の発達という岩質的特徴をもつ。



第6図 周辺の遺跡等

